

# B・S・クラークとは誰か

## — クラーク記念館の新資料紹介 —

**Who is Byron Stone Clarke?**

**A History of the Byron Stone Clarke Memorial Hall,  
School of Theology, Doshisha University**

**本井 康博**  
Yasuhiro Motoi

キーワード

同志社、クラーク神学館、クラーク記念館、バイロン・ストーン・クラーク

KEY WORDS

Doshisha, Byron Stone Clarke Memorial Hall, Byron Stone Clarke

要旨

同志社大学今出川キャンパスのランドマークと言え、クラーク記念館（旧神学館）である。にもかかわらず、従来は「クラークって誰」であった。彼は、プリンストン大学の出身者で、同大学院に入学してまもない1891年1月に急死した。聖書を愛読する会衆派の信徒であった。息子の死を悼んだ両親、とりわけ母親が、11,500ドルを寄附して、建てられたのが、この神学館であった。肖像写真など新資料がいくつか入手できたうえ、学生生活の一端や、家族関係や死因、墓の所在地も判明した。

SUMMARY

The Byron Stone Clarke Memorial Hall is the second theological hall of the School of Theology, Doshisha University, Kyoto, Japan. It was erected in 1893 to commemorate a special gift of \$11,500 from Mr. and Mrs. Clarke to Doshisha through the American Board of Commissioners for Foreign Missions. Using new materials and data, including portraits, his career, and his family's graves, this paper clarifies the identity of Clarke that has been kept in the dark for such a long time. For the first time at our campus, his

memory will be honored for all to see.

## 「隗より始めよ」

同志社の第2代神学館は、クラーク神学館 (Byron Stone Clarke Memorial Hall) と呼ばれる。B・S・クラーク (Byron Stone Clarke) なる人物の名前に由来することは、館名からすぐに推測できる。しかし、「クラークとは誰か」と問うと、誰も答えられない。実に不可解である。今にいたるまで、彼についての個人情報、悲しいくらい乏しかった。

今春、5年におよぶ長期の復元修理工事が竣工し、建設当時の秀麗な容姿がみごとに蘇った。記念行事がいくつか実施された。私も、40数年振りに復元された2階の「講堂」——私案が承認されて、新たに「クラーク・チャペル」と命名された——で記念講演を行った。話しの最後を、私は次のような言葉で締めくくらすをえなかった。

「それにしても、クラーク家の情報は少なすぎます。両親の履歴同様、神学生といわれた子息の経歴や写真も入手できていません。

彼の父親の名前さえ正確に掌握できていない有様です。かろうじて Byron W. Clarke と推測されるだけです (*Missionary Herald*, Oct. 1891, p. 397参照)。ひとまず、Byron W. Clarke (父) と Helen Stone Clarke (母) の息子が Byron Stone Clarke であるとしておきます。こうした名前の特定を含めて、クラーク一家の究明は、同志社に課せられた今後の大きな課題です」

(拙稿「同志社神学館の変遷 —— 三十番教室からクラーク神学館へ ——」22頁、『基督教研究』第70巻第1号、2008年7月)。

そこでこの講演を契機に、まずは「隗より始めよ」である。すぐに調査を試みた。プリンストン大学マッド図書館 (Mudd Library) アーキビストのクリスチン・ターナーさん (Kristin Turner) の協力が得られた結果、幸いにも B. S. クラークの肖像写真 (2枚)、ならびに略歴などが入手できた。そのうえ、ほぼ同時にクラーク家の墓の所在が北垣宗治 (同志社大学名誉教授)、アレクサンドラ マイストラツ=コビルスキ (Aleksandra Majstorac Kobiljski. ニューヨーク市立大学大学院歴史学研究科博士課程。2008年10月からは Japan Foundation の奨学金を得て、同志社大学大学院法学研究科に留学) 両氏の尽力で判明した。

さらに、夏以降、坂本清音氏（同志社女子大学名誉教授）の斡旋により、パサデナ歴史協会のアーキビスト（John Ripley, Paul Second, and Kirk Myers）の協力が得られ、クラーク家の家系や家計の細部がより鮮明にされた。

本稿では、これらを合わせて、「講演補遺」の形で新資料の紹介をしたい。同志社、ならびにクラーク記念館にとって、今年（2008年）は記念すべき「第二の<sup>スタート</sup>創建」になりそうである。

## 全ては闇の中

今回入手した資料のうち、2枚の肖像写真は、一足先に学内機関誌（*One Purpose* 156、2008年10月1日）で紹介した。合わせて略歴に関しても、同誌掲載の拙稿「B・S・クラークが同志社デビュー——クラーク記念館修復工事竣工を祝して——」で、一部を披瀝した。

本誌にも、同じ写真を巻頭（口絵頁）に飾る。それ以後に入手できたデータをも詳しく紹介してみたい。なにしろ、経歴については、クラーク記念館1階ホールに掲げられているタブレットにある文言、「1891年1月に23歳で永眠。神の言葉を学ぶことを好んだ」以上のことは、まったく不明であった。

同様に、寄付の由来に関しても、「ニューヨーク州ブルックリンのクラーク夫妻が、亡き子息を記念して同志社に寄付をした」程度の情報であった（なお、ここにあるブルックリンは、当時はニューヨーク市に隣接する独立した市である。その後、1898年にニューヨーク市と合併して、現在は、ニューヨーク市ブルクツリン地区となる）。肝心の「亡き子息」は、容貌にしろ、経歴にせよ、お厚いベールに包まれたままであった。さらに父親の職業や寄付を主導した母親の家系に関しても、何の情報もなかった。

要するに、ほとんどが闇の中だった。

## 死亡記事

クラーク資料に関する最初の手がかりは、『ニューヨーク・タイムズ』（*The New York Times*）にあった。1891年1月19日号にバイロン・ストーン・クラークの死亡記事があった。

「バイロン・ストーン・クラーク。[1891年] 1月17日、土曜日、ニュージャージー州プリンストン市で [死去]。23歳。ニューヨーク州ブルックリン市のバイ

ロン・W・クラークとヘレン・ストーン・クラークの子息。葬儀は身内で〔執行〕（〔 〕は本井）。

本人は、もちろん業績を挙げた著名人でもない。わずか23歳の青年、したがって一市井人にすぎない。そうした人物を『ニューヨーク・タイムズ』がわざわざ取り上げているのは、当時の名門大学生のステータスの高さだけでなく、かなりの家系の子息だからであろう。それにしても問題は、死因である。これに関してもその前日号でいいいな報道がなされている。

「ニュージャージー州プリンストン。1月17日。電気工学大学院（School of Electrical Engineering）1年在籍中のバイロン・クラークは、4日間の闘病の後、今朝早く、息を引き取った。死因は急性腹膜炎。フィラデルフィアのアグニュー博士（Dr. Agnew）が、昨日、補助者と共に手術を施したが、病気の進行が早く、手術は無駄であった。クラークの自宅はニューヨーク州ブルックリン市。〔ニュージャージー〕大学学芸学部を昨年、優秀な成績で卒業した」

（*The New York Times*, Jan. 18, 1891）。

ここで、「学芸学部」とされているのは、いわゆるリベラル・アーツ学部を指す。なお、卒業が昨年（1890年）、とされているのは、事実誤認である。実際は、後に見るように1889年6月のことである。

それはともかく、この記事は死因を急性腹膜炎と明示している。新島と奇しくも同じである。ただ、クラークの場合は、一応手術を施している。一方、新島の場合は、手術は思いもよらず、ただモルヒネで痛みを散らす以外に手はなかったという。ちなみに日本で急性腹膜炎（盲腸炎）の手術が、初めて行なわれるのは、新島が永眠してから10年後、という。

奇遇といえば、さらに、年齢こそ隔たるが、死亡日時が1月の中旬というのも、不思議である。それもクラークの死は、新島襄の永眠からちょうど1年と1週間後である。

## 父親の死亡記事

『ニューヨーク・タイムズ』には、クラークの両親の死亡記事もあった。参考までに紹介する。まずは、クラークの父である。

「バイロン・W・クラーク。1894年11月13日、火曜日の朝、ニューヨーク州ブルックリン市セント・マークス通706の自宅で [死去]。66歳。葬儀は11月15日、木曜日に SPM で執行 [予定]。親戚ならびに友人たちが参列」

(*The New York Times*, Nov. 14, 1894)。

息子の死後、3年にしてブルックリン市で亡くなっている。ちなみに、その後の調査でも、父親のミドルネーム (W) の詳細は、依然として不明である。碑文を始め、諸種の記事や記録は、すべて頭文字 (W) だけである。

父親の生誕地はニューヨーク州 (Erie County, New York) で、1828年12月10日の生まれである。1851年には先妻のアダリン (Adaline Amanda Thompson) とダンカーク (Dunkirk, Chautauqua County, NY. 場所はバッファロー西南で、エリー湖岸にある) で結婚した。彼女は1864年に死去した。ふたりの間の子どもは全部で5人である (Paul Second の調査)。

先妻が死去した翌年 (1865年) の10月12日、二度目の妻と結婚した。それがヘレンである (北垣宗治「アーモスト大学・同志社大学関係史の資料探索」同志社大学人文科学研究所研究会レジュメ、2008年9月19日)。ふたりは、アダリンに居を構えているので、夫のクラークはそれまで先妻と住んでいた家にヘレンを迎えたのであろう。

B・W・クラークの職業は農業で、相当に手広く耕作する富裕農であった。1860年の国勢調査によれば、職業は「農業、資産2万ドル」とある。この時、子どもが4人いるためか、手伝い人を3人雇っている。

それが、10年後の調査では、「農業、不動産5万ドル、個人資産6万ドル」となっており、大幅な資産増である。家族は、妻ヘレンに、子どもは5人、手伝い人はふたりである。

1880年には、住所はすでにブルックリン (706 St. Mark's Avenue, New York) である (Paul Second の調査)。都会に居を移したのは、この前後に、自ら耕作するというよりも、地主としての生活に切り替えたからであろうか。いずれにせよ、同志社に1万ドルの寄付をしたのは、それからさらに10年が経過しているので、相当の資産家 (地主) になっていた、と推測できる。

## 母親の死亡記事

ついで、母ヘレンの死亡記事である。

「ヘレン・ホウム。[1911年] 1月27日、金曜日、カリフォルニア州パサデナで

[死去]。故バイロン・W・クラークの妻。79歳]

(*The New York Times*, Jan. 30, 1911)。

名前が「ヘレン・ハウム」とあるのが、不可解である。これまでの伝承でも、次の記事でも「ヘレン・ストーン」が正しい。ミドルネームを入れると、Helen Butler Stone である (Paul Second の調査)。

ちなみに、ブルックリン市セント・マークス通706の自宅は、1885年頃に購入されたもので、夫の死 (1894年) 以後、ヘレンは1901年までここで生活した。それ以降の住所については、不明である。それまで住んでいた自宅 (建物) は、1905年には別人の所有になり、1916年の時点では取り壊されている (本誌口絵⑤。「アーモスト大学・同志社大学関係史の資料探索」)。

なお、1897年にヘレン (65歳) がパスポート申請をしたさい、自分の職業 (occupation) を「有閑女性」(Lady of Leisure) としているのは、興味深い (John Ripley, Paul Second, and Kirk Myers の調査による)。

ヘレンの家系であるが、まず父親 (Sumner Stone) は、マサチューセッツ州生まれの衣類商である。ジョージア州メイコンやオハイオ州コロンバスなどを経て、ニューヨークに移り、財をなした。妻 (Elizabeth Wick) とはメイコン時代に結婚し、6女5男を設けた。そのうち、4女がヘレンである。彼女は、1831年10月23日、ニューワーク (ニュージャージー州) の生まれである。一方、ヘレンの母親は E・ウィックであるが、彼女自身のことは家系とともに不明である (Paul Second の調査)。

さて、先のヘレンの死亡記事から4カ月後に、遺産相続の記事が出た。

「ヘレン・S・クラーク、カリフォルニア州パサデナで死去。1万ドルを越える動産を C・C・クラークと C・C・アボットに残した」

(*The New York Times*, May 12, 1911)。

遺産を相続した C・C・クラークと C・C・アボットは、後述するように、当時、健在であったふたりの子どもたちである。それにしても、動産がわずかに1万ドルというのは、少ない印象を受ける。同志社への生前の寄付が1万1,000ドルを越えたことを思うと、なおさらである。夫が死去した後の生活は、生前ほど裕福ではなかったのか。あるいは、不動産を別に所有していたのであろうか。

それはともかく、さすがに彼女の永眠の知らせは、どういうルートであったかは不明であるが、同志社にすぐに届けられている。同志社女学校機関誌、『女学校期報』30 (38頁、1911年8月25日) に死亡記事が出た。

「クラーク夫人の訃 — 我同志社神学校館の寄附者たる同夫人は、老齡にて加州パサデナに保養中なりしが、去一月廿七日、永眠せられたる由」。

ちなみに、晩年の夫人がどこに住んだかは、不詳である。ブルックリンから西海岸に移り住んだのか、それともパサデナは旅行、訪問、その他の短期的な滞在先であったのか、いずれも定かではない。「当時、よくあったように、健康上、冬の寒さを避けるためにニューヨークを離れたと思われる。パサデナとの繋がり、永眠地となった以外にはない」(Paul Second) という辺りが、ほぼ妥当であろう。

## クラークの墓が判明

次に、クラーク家の墓であるが、場所はニューヨーク市ブルックリン地区 (5 Bay 25<sup>th</sup> Street, Brooklyn, New York) にあるグリーン・ウッド霊園 (Greenwood Cemetery) である (本誌口絵⑥)。

クラークの墓の番地は、Lot 15899, Section 124で、埋葬日 (Date of Interment) は1891年1月20日である。同月17日の永眠であるので、葬儀をどこで済ませたのかは不明であるが、ただちにブルックリンに埋葬されたことが分かる (本誌口絵④)。

両親の墓も並んで建てられている。父親の埋葬日は、1894年11月16日、母親は1911年5月6日である。これ以外にこの地区 (Lot 15899, Section 124) には、なお5基が並ぶ。つまり全部で8基の墓が揃っている。

父親の墓は、大きな墓標 (Clarke と刻まれている) の前にあり、ふたりの女性の墓に挟まれている。先妻 (向かって右) と二度目の妻 (向かって左) である。その周囲を彼らの子どもたちの墓 (5基) が取り囲むという形である (本誌口絵③では6基)。

先妻のアダリンは、31歳で死去している。墓碑には、**Adaline A. Thompson, Wife of Byron W. Clarke, 1833-1864**とある。なぜ旧姓で墓が設けられたのかは、判然としない。

二度目の妻 (こちらがB・S・クラークの母) の墓には、**Helen Stone Clarke, Wife of Byron W. Clarke, 1831-1911**と彫られている。前述もしたが、彼女はブルックリン市在住の資産家、S・ストーン (Sumner Stone) の娘で、結婚は1865年10月12日であった (「アーモスト大学・同志社大学関係史の資料探索」)。

さて、ヘレンの家族であるが、ニューイングランド移民の旧い家系を引く。父方の祖先は、ジョージア州で綿花貿易によって資産を作った商人であったという (Paul Second の調査)。ヘレンは、自身が豊かな家庭の娘として、富裕な農業資産家と結婚したわけであるので、生涯、生活には困らなかったであろう。

## クラーク家の子どもたち

さて、クラーク家の子どものうち、先妻との間に生まれた子は5人である。ただし、墓は4基しかない。墓碑によれば、名前と生没年は、Julia E. Clarke (1853-1867)、Courtlandt C. Clarke (1855-1937)、Kate Lee Clarke (1858-1865)、Adaline T. Clarke (1858-1880) である。ケイトとアダリンは、生年が同じであり、記録からも双生児である。

国勢調査などから、彼らのフルネームを記しておく、上から Julia Eldridge Clarke、Charles Courtlandt Clarke、Kate Lee Clarke、Addie Clarke、Camellia Louse Clarke、Byron Stone Clark となる (Paul Second の調査)。

ところで、グリーンウッズ霊園に墓がないのは、4女のカメリア (Camillia Clarke Abbott) である。彼女は1861年4月にダンカークで生まれ、1921年6月26日にインド旅行中に罹病し、その地の病院 (Miraj Hospital) で亡くなっている。ちなみに、夫のアボット (Justin Edwards Abbott) は1932年6月19日にサミット (Summit, New Jersey) で亡くなっている (Paul Second の調査)。したがって、カメリアの墓は、インドかサミットのどちらかであろう。

そして2度目の妻との間に生まれたのが、わがクラークである。場所は、ダンカークである (Paul Second の調査)。結局、ヘレンにとっては、唯一通りの実子であった。

以上、6人の子どものうち、ヘレン・S・クラークから遺産を譲渡されたのは、C・C・アボットとC・C・クラークである。前者は次女のカメリア、後者は長男である。いずれも、夫の先妻の子どもである。ヘレンが亡くなった時点で、健在であった子どもは、彼らふたりだけであった。残りの4人は、B・S・クラークを含めて、母親よりも早くに亡くなっていたのである。

## アボットの略歴

ここで、4女のカメリアの夫であるアボットについて、まとめておきたい。アボットは会衆派牧師、神学博士で、1902年12月にカメリアとナポリで結婚し、のちボンベイに移ってインド伝道に従事した。

彼の略歴は、以下の通りである (Philip Schaff, *The New Schaff-Herzog Encyclopedia of Religious Knowledge*, Vol. 1, p. 7, Grand Rapids, MI: Baker Book House, 1952, a digital facsimile)。



「長老派信徒。1853年12月25日、ニューハンプシャー州ポーツマスで生誕。1876年、文学士としてダートマス大学卒。1879年、ユニオン神学校卒。翌年、会衆派牧師として按手を受く。1881年から翌年まで、ニュージャージー州ノーウツの長老派教会で牧会した後、アメリカン・ボードの宣教師としてインドへ赴任。以来、マラタ・ミッション (Maratha Mission) のボンベイに定住し、科学雑誌にインドの碑文や古銭学に関する多数の研究論文を寄稿し続けた。その一方で、ヒンズー教徒の改宗者用にマラチ語の宗教書を用意した」。

アボットの教派は、もともとは長老派であるが、アメリカン・ボードの宣教師となってインドへ派遣されたことは、看過できない。もちろん、クラーク家の娘（教派は、やはり会衆派である）と結婚するのは1902年であるので、それ以前は、クラーク家はとりたててアメリカン・ボードと近い関係ではなかったと考えられる。とりわけ、身内に宣教師がいるという状況ではなかった。

したがって、それ以前の1891年の時点で、クラーク家がアメリカン・ボードを通して同志社に寄付をしたことは、奇しきことである。

なお、アボットに関する記事が、『ニューヨーク・タイムズ』に3件あるので、付記しておきたい。

#### 1、1900年6月28日付

昨日、第131回ダートマス大学卒業式で、インド伝道中のアボット牧師（1870年クラス）に神学博士号 (D.D.) が授与された。

#### 2、1932年6月20日付

昨日、ニュージャージー州サミットで死去。元インド派遣宣教師。妻は故カメリア・クラーク・アボット、弟はミネソタ州ノースフィールドのアルバート・A・アボット (Albert A. Abbott)。葬儀は身内で。

#### 3、同上

30年間、インドで宣教師として活躍した会衆派の引退牧師、アボットが、昨日、自宅 (120 Hobart Avenue, Summit, NJ) で長い闘病生活のうえ、死去。享年79。弟 (Albert A. Abbott) は健在。

ダートマスとユニオン神学校を卒業後、亡き父親 (Amos Abbott) が宣教師として長く働いたインドのマラチ・ミッション (Marathi Mission) に派遣された。主としてボンベイを拠点として伝道するかたわら、雑誌 (*Duyanodaya*) の刊行や、マラチ語訳の聖書改訂など、文筆活動にも力を注いだ。

1911年以降は帰省してサミットに住み、インドの詩聖たちの翻訳に従事。この地のYMCAやYWCAの理事をも永年務めた。ハンセン病患者の救済団体（American Mission to Lepers）の理事長として、1924年には南米を視察している。

## 神学生ではなくて

さて、B・S・クラーク本人に戻る。先の新聞報道によれば、彼はプリンストンで亡くなっている。その身分も死因も判明した。大学卒業後、大学院（電気工学）に籍を置いていたのである。ただし、死亡当時は1年生であるので、大学卒業の時点から数えると、1年のブランクがある。つまり、大学を卒業してストレートに大学院に進学をしていない。

その理由は、不明である。場合によっては、プリンストンの電気工学部は、ブラッケル（C. F. Brackell）によって1889年に開設されたばかりであるので、大学院がすぐには出来なかったのかも知れない。後述するように、クラークはその間、大学院進学までの1年間は実業に従事していた可能性がある。

それはともかく、報道に従えば1月14日の発病であるから、クリスマス休暇を終えて、大学院に戻った矢先の急死であることが、分かる。家族を始め、周囲の人たちの驚きが、推測できる。

終焉の地となったプリンストンには、プリンストン大学に隣接して有名な神学校がある。しかし、彼はこの神学校とは、直接の関係を持たなかった。同志社においては、これまで神学館のタブレットにある文言、「神の言葉を学ぶことを好んだ」という一文から神学生のイメージが強かった。実際、当時クラーク家から寄附を受ける際、同志社側の窓口となった外国人教員で宣教師のスタンフォード（A. W. Stanford）も、斡旋してくれたミッション（アメリカン・ボード）に対して、「クラークは神学生か、だとすると、どこの神学校の学生か」と問い合わせをしているくらいである（拙稿「同志社神学館の変遷」17頁）。

## プリンストン大学を卒業

実は神学生ではなく、神学校に隣接する名門のプリンストン大学（当時は the College of New Jersey）の学生であった。兄のコートランドもプリンストンの卒業生（1878年卒）であった（Paul Second の調査）。つまり、クラーク家の息子（先妻の子と二度目の妻の子）は、ふたりともプリンストンに進学しているわけである。

B・S・クラークに関して、プリンストン大学マッド図書館に照会したところ、

アーキビストのクリスチン・ターナーさんから、大学卒業クラスの年報 (*The Nassau Herald of the Class of '89 Princeton, Class Day, Monday, June 17, 1889, Number XXV, Princeton, 1889*) が送られてきた。その中の統計 (Class of 1889 Statics) によると、クラークの個人情報、以下の通りである。

誕生は1868年1月16日、卒業は1889年6月である。学位は新島と同じく「理学士」であり、教派も同じ会衆派である。これは、実に奇しき一致と言わざるをえない。長老派系の大学だけに、級友 (22名) の大半は、長老派でなければ、監督派の信徒である。会衆派はわずか2人である。そのことを思えば、貴重な存在と言えよう。

体格は、巨軀である。体重は180ポンド、身長は6フィート、胸囲は39.25インチである。卒業後の希望進路は、実業とある。政治的にはリパブリカン、経済的には保護貿易主義者である。

学内サークル活動としては、文芸サークルであるクリオソフィック協会 (Criosophic Society) に加入していた。周囲からは「フトッチョ」(Fatty) あるいは「クラークー」(Clarkie) の愛称で呼ばれていた。自宅住所は、ブルックリン市 (706 St. Mark's Avenue, Brooklyn, N.Y.) である。

学内で寄宿していた寮は、ウィザースプーン・ホール (Witherspoon Hall) といい、その一角 (West Middle Entry) にある2号室に住んだ。別の資料 (*Bric-A-Brac, p. 39, The Junior Class, Princeton College, MDCCCLXXXV III, 1889*) によると、ルームメイトは、同級のブラウニング (John Prentiss Browning) で、ニューヨーク州クーパースタウンの出身である。

ちなみに、この寮は1877年に10万ドルの巨費を投じて創建されたが、当時は「アメリカでもっとも豪華な大学寮」との評判をとったという。ちなみにここに3年間住んだ学生の中で、もっとも著名なのは、ウィルソン (W. Wilson) であろう。後にプリンストン大学教授、学長などを経て、アメリカ大統領となる人物である。彼は1879年クラスであるので、クラークの10年先輩に相当する。

ウィルソンが、母校の教授に就任したのは1890年であるので、クラークは院生として、この寮の先輩と同じキャンパスで接触する機会は幾度もあったはずである。

## 大学を出た2年後に急死

ところで、プリンストンから送られてきた資料に添えられたクリスチンさんのコメントも貴重である。クラークは文芸サークル以外に、宗教的な組織であるフィラデルフィア協会 (Philadelphian Society) にも所属していたという。信仰に篤い学生であったことが窺える。さらに次のようなコメントが加えられている。

「最初のクラス・リユニオン・ブックによれば、クラークの住所は、ニューヨーク州ブルックリン市セント・マークス通706番地とあります。当時、おそらく卒業直後でしょうが、彼は金物を扱う実業（the hardware business）に従事していました。私どもの記録では、永眠日は1891年1月17日です。プリンストンで亡くなっていますが、なぜ彼がプリンストンにいたのか、これについて言及するものは何ひとつ見つけられませんでした。死因についても、何ら情報を得ることができませんでした」。

この時点で彼女が不明とした諸事実のうち、後の個人的な調査でその一部が判明したことは、すでに繰り返すまでもない。要するに在籍中の急死なのである。

さらにクラークが大学卒業後、「金物を扱う実業」に従事していたとの情報に関して付言すると、これは家業ではない。前に見たように、父親の職業は農業であった。

## 会衆派

つぎに注目すべき情報は、彼の教派が会衆派であるという事実である。なぜなら、ここから両親（家族）の教派も会衆派であると推定できるからである。

現実に母親はブルックリンの会衆派教会（Central Congregational Church）に所属していた。クラークの父親も、そうであろう。当時の教会資料は現在、同地の歴史協会（Brooklyn Historical Society）に委託されている。それによれば、ヘレンが教会の家族専用席（pew）の賃貸料金を支払ったことが確認できる。したがってわれらのクラークも、子どもの時から大学に進学するまで、日曜日にはそこで礼拝を守り、信仰を養ったと考えられる。

なお、この教会は、1942年に近隣地区（クリントン・ヒル）の会衆派教会（Clinton Avenue Congregational Church）と合併した際、改称され（Cadman Memorial Congregational Church）、現在にいたっている。

ちなみに、クラーク家は、同志社はもちろん、日本とも縁遠い存在であった。父親のクラークは、海外旅行を3度経験しているが、いずれもヨーロッパである（Paul Secondの調査）。一説には「1891年の時点で、クラーク家と同志社との繋がりは、ニューヨークの教会だけであった」という（Paul Second）。それがどの教会であれ、同志社との密接な関連は考え難い。やはり、会衆派系のミッション（アメリカン・ボード）を介在とする繋がりが、最有力とみるべきであろう。

## H・M・ランドイス

それはともかく、クラーク家の教派が会衆派であるということを確認できた意味は大きい。同様に、クラーク神学館に関しても、決定的に大事である。なぜなら、この事実の中に、クラークの両親（とりわけ母親が）が、息子（享年23歳）を追悼する神学館建築費として、長老派ではなく会衆派のミッション（アメリカン・ボード）に1万ドルを寄付した理由が見出せるからである。

さらに同志社が、クラーク神学館の設計者として、明治学院教員のH・M・ランドイス（H. M. Landis）の紹介で、ドイツ人設計士のR・ゼール（R. Seel）を指名した謎も解けるのではないか。ランドイスは、自ら建築にも造詣が深く、1890年に今の明治学院記念館を設計したと言われている長老派宣教師である。プリンストン大学（1885年卒）とプリンストン神学校（1888年卒）で学んでいる。この間、ベルリン大学にも遊学して、ドイツに親しんでいる。神学校を卒業するや、アメリカ長老教会外国伝道局から日本に派遣された。

つまり、ランドイスはプリンストン大学卒業生としてクラークの先輩に当たる。そのうえ、クラークの大学時代とランドイスの神学校時代は、一部、重なっている。隣接する小さな学園同士であるから、ふたりは当然、相互に面識や交流があったもの、と考えるのが普通である。ランドイスに直接に設計の打診をしたのは、建築委員でもあった同志社教員のデイヴィス（J. D. Davis）あたりであると考えられるが、両者は当然、宣教師として旧知の間柄であったはずである。

同志社から打診を受けたランドイスとしても、先に述べた好<sup>よしみ</sup>から、亡き後輩の記念館を日本に新築する計画に喜んで関与、協力したであろう。彼自身、建築に明るいうえ、ドイツ好みであった点から、ドイツ人設計士の斡旋は、たやすいことであったはずである。

## 同志社のワイドナーに

次に2枚の肖像写真である。まずニューヨーク市ブロードウェイ841にある著名な写真スタジオ（Pach Bro's）で撮影したのが一枚。撮影時期は不明である。高校時代のものであろうか（本誌口絵②）。

2枚目は、ブルックリン（298 Fulton St. Brooklyn, NY）のスタジオ（Frank Pearsall）で撮影された。おもて面に残された書入れによると、撮影は1890年12月31日、つまり永眠18日前である（本誌口絵①）。

それにしても、やつれた病人にはとうてい見えないので、急死であることが窺える

証拠にもなる。生没年月日も添えられている。1868年1月16日生まれで、1891年1月17日の午前3時に死去、とある。

永眠は、この写真を撮った直後のことであったので、当初は事故の可能性も考えた。仮にもし、そうだとすれば、ハーバード・カレッジのワイドナー記念図書館(Widener Library)の建築費を寄付した篤志家と一脈通じる場所であった。この図書館は、有名なタイタニック号の遭難事故で息子を亡くした母親(Eleanor Elkins Widener)が、27歳で事故死した息子(Harry Elkins Widener)を偲んで、2万ドルの巨費を息子の母校に寄贈した結果、出来上がったものである。内部には、息子の書齋を模した部屋が設けられ、肖像画が掛けられている。

## もっと光を

それに対して、クラーク記念館の場合、クラークを偲ぶものは、ひとつもない。記念室や肖像画はともかく、せめて肖像写真を額装して、1階ホールに架けておきたいものである。それも、いま掛けてある両親の2枚の写真に並べて、である。

ちなみに、同じ今出川キャンパスにある同志社アーモスト館も、亡き息子(S. B. Nichols)を悼んだ母親(M. S. Nichols)が、建築費を最初に寄贈して出来た記念の建物であるが、そのことはきちんと顕彰されている。さらに、ハリス理化学館の場合には、寄付者(J. N. Harris)の立派な肖像画(油彩)が、同館2階に掛けてある。

一方、ハーバードのワイドナー記念図書館の場合には、顕彰面ではこれ以上の配慮が払われている。同館は、よく知られるように世界最大の大学図書館である。もともとは、ハーバード・カレッジの図書館であり、このカレッジのランドマーク的建造物である。それに対して、クラーク記念館もまた、同志社大学のシンボルである。したがって、両者ともに観光客にも大層愛好されている。

それだけではない。ほかにも、両者には共通項が存在する。共に若死にした息子(一方は27歳、他方は23歳)を記念する建物である。ワイドナーは愛書家(蒐書家)であったために図書館が、クラークは聖書研究を好んだ青年であったので神学館が、それぞれの永眠を記念する建物としてはもっとも相応しい、と考えられた。

さらに、母親(父親ではなくて)が巨額の指定寄付を大学に捧げた点や、それぞれの息子の名前が建物につけられている点も、共通する。行論上、すでに明白のように、クラーク家からの寄附に関しては、父親の影は極めて薄い。母親主導で進められたことは、確実である。この点を立証してくれる資料はいくつもあるが、ここでは次の資料を一点だけ挙げておきたい。クラーク記念館の工事中に同志社の外国人教員(宣教師)が出版した書物(M. L. Gordon, *An Missionary in Japan*, p. 162, Houghton,

Mifflin and Company, 1892) にはこうある。

「ニューヨーク州ブルックリン市のB・W・クラーク夫人は、最近 [昨年]、子息の記念に神学館を建てるために1万ドルを寄附したばかりです」。

## ストーン家の家族意識か

父親ではなく、母親が寄付したという理解は、同志社側、とりわけ宣教師たちには共通していた。その点を捉えて、英文館名は Stone-Clarke とあるように、わざわざストーンとクラークの間にハイフンを入れている意味を強調する見解もある（北垣宗治「クラーク家のお墓発見」『同志社タイムス』2008年11月29日、同志社校友会）。

たしかに、9人家族の中でヘレンにとっては独り息子だけが血が通っている。それだけに、前の母親の子ではなく、ストーン家出身の私の息子ですよ、といったヘレンの無言の主張とも取れないことはない。あるいは、彼女の父親（Sumner Stone）は1855年に死去しているが、兄弟、姉妹（あわせて10人）にも恵まれているので、寄附にあたって何らかの金がストーン家から出ていないとも限らない。

とりわけ、ヘレンの妹（Delia Wick Stone）はニューヨーク州バッファローの富豪（Charles S. Clarke）と結婚していたので（Paul Second の調査）、可能性がないわけではない。想像を膨らませて、かりに義弟から援助があったと仮定すると、ストーンとクラークとの間に引かれたハイフンは、（それに意味があるとする）二重の意味を持つのかも知れない。

さらに大胆な推測をすると、先に紹介した家族の墓のうち、先妻（Adaline Amanda Thompson）だけクラークの名前が入っていないのも、これと関連するのも知れない。すなわち、ヘレンは夫の死後、墓を整備し直し、それぞれの碑銘を自分で指示して彫らせたという可能性は、考えられないであろうか。

いずれにせよ、クラーク家だけでなく、あるいはクラーク家以上に、ストーン家の一員であるとの意識が、ヘレンには強かったのかもしれない。もしそれが事実ならば、長男（コートランド）と違って、次男は自分にとってはストーン家の独り息子であるとの思いが、多少ともヘレンにはあったとも思われる。

そうした点を含めて、これまで同志社ではクラークを知ることが少なく、したがって彼を顕彰するのが、きわめて遅れていた。同志社アーモスト館やハリス理化学館はもちろん、ワイドナー図書館にも倣って、今後、大いに整備、喧伝する必要がある。

